

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Characteristic and the Subject of Green Tourism in New Caledonia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002091

ニューカレドニアのグリーン・ツーリズムの特徴と課題

中村 純子
(横浜商科大学商学部)

The Characteristic and the Subject of Green Tourism in New Caledonia

Junko Nakamura
(Yokohama University of Commerce)

これまでグリーン・ツーリズムは農村地域の資源や景観を活用した地元住民が関わる観光として、開発国の地方とくに農村の研究に傾りがちだった。しかし田園地域の観光として、より広範な地域を対象にできる。観光を首位産業とするニューカレドニアでグリーン・ツーリズムを事例に特徴と問題を分析すると、フランス海外領土であるためフランスの観光概念の影響を受け、さらにニューカレドニアの観光構造や地理的・社会的要素が深く関わっている。今後克服すべき課題としてツアーの不安定性、エコ/エスニック・ツアーとの混在性、多文化資源の利用があり、地域の変数をみることがグリーン・ツーリズムに不可欠である。

Green tourism is defined as the tourism which makes use of the resources and the scene in rural district by the local inhabitants. Lots of the literatures on tourism of farm villages in developed countries, however we are able to define it as tourism covered a wide area. Considering the case study of green tour in New Caledonia, it is influenced by French concept for tourism, also is concerned in the structure of tourism industry, geographic and social factor. To get over several problems, such as unsteadiness, mixture with eco/ethnic tour, the usage of cultural diversity, it is essential for taking account of the regional variable.

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 3.1 ツアーの諸事例にみる特徴 |
| 2. ニューカレドニアの観光概説 | 3.2 「持続」に関する問題 |
| 3. ニューカレドニアのグリーンツーリズムの分析 | 4. グリーン・ツーリズムの今後の課題 |
| | 5. おわりに |

Key words: New Caledonia, inland-excursion, life-style of guide, the structure of tourism industry,
“sustainability”

キーワード：ニューカレドニア、内陸部ツアー、ガイドのライフ・スタイル、観光構造、
「持続性」

1. はじめに

グリーン・ツーリズム (green tourism: 緑の観光) は、ソフト・ツーリズムや「適性観光 (appropriate tourism)」、 「持続可能な観光 (sustainable tourism)」などと共に新しい観光のあり方として 1990 年代に重視されはじめた。新しい観光のあり方とは、1960 年代に隆盛したマス・ツーリズムの弊害面に対処すべく構築された対概念である「もうひとつの観光 (alternative tourism)」をさらに発展させた概念である (石森 1996:22)。「もうひとつの観光」は国際観光研究学会 (International Academy for the Study of Tourism) の Zakopane セミナーで観光の新しい形として提唱されて以来、様々な定義がなされた。グレバーン (Nelson Graburn) とランファン (Marie-Françoise Lanfant) は「もうひとつの観光」が質や責任、尊厳といったものを暗示し、善意を含むようになったと指摘する (Smith & Eadington 1992:89)。この言葉は単なる分類上の形態を示すだけでなく、善悪の感情と価値を付帯させることになった。つまり「もうひとつの観光」は主流であるマス・ツーリズムとの対照化により、その基盤を形成していった。

しかし、上記の「もうひとつの観光」の定義が脆弱であるゆえに、実態なき抽象的理論として批判されるべきではない。「もうひとつの観光」に対する単純な反駁はマス・ツーリズムの物象化、つまりマス・ツーリズムの存在を容認することに繋がり、さらにはマス・ツーリズムを無批判に固定化あるいは絶対視することになりかねない。むしろこれらの分析概念を仮に使用して複雑な観光現象を考察し、その枠組みからもれ落ちるものを包摂する概念に修正することが重要と考える。その第一段階として、地域における観光の特徴を浮き彫りにし、そこでの意味や問題をとらえる必要がある。

したがって、「もうひとつの観光」の亜形であるグリーン・ツーリズムがニューカレドニアにおいて展開する状況を、その特徴と課題から分析することが本稿の主旨である。この分析には 2 つの意義があると考えられる。ひとつはグリーン・ツーリズムが地域のホストによってどのように把握されているかが示せる点であり、もうひとつはグリーン・ツーリズムの事例研究が欧米や日本など開発国の地方に偏る傾向を緩和するため、ニューカレドニアという南太平洋の島嶼を事例に挙げることで、開発国以外の地域におけるグリーン・ツーリズムを明らかにできる点である。

ここで、グリーン・ツーリズムについての定義を概説すると、研究者により多様に定義されており、ルーラル・ツーリズム (rural tourism) と同義に扱う場合 (Smith & Eadington 1992:10)、また広義のルーラル・ツーリズムの一部に相当すると解釈する場合もある (山崎・小山・大島 1993:2)。後者は以下の 3 つの要件を満たすものがグリーン・ツーリズムであると定義している。

- ①あるがままの自然のなかでのツーリズムであること (古い伝統的な農村・山林)。
- ②サービスの主体が、農家などそこに居住している人たちの手によるもので、訪問者は地元住民の手で作られたサービスを楽しむ。
- ③農村のもつさまざまな資源、生活・文化的ストックなどを、都市住民と農村住民との交流を通して生かしながら、地域社会の活力の維持に貢献していること (農家経営の民宿、レストラン、キャンプ場、農産物販売所)。

さらに、「緑豊かな自然、美しい景観の中での休養、自然観察、地域の伝統的・個別的文化との出会い、農村生活体験、農村の人々とのふれあいを求めての旅」(井上・中村・山崎 1996) と観光客行動の視点からの定義もある。

グリーン・ツーリズムは国によりその表現方法が異なることでも知られる。たとえば、ドイツではルーラル・ツーリズム、イギリスではグリーン・ツーリズム、イタリアではアグリ・ツーリズム、フランスでは観光省がグリーン・ツーリズム、農業関係機関でアグリ・ツーリズムなどと呼ばれている。

とくに、フランスにおいてはツーリズム・ヴェール (tourisme vert) と称され、一般的には農村ツーリズム (tourisme rural) と同義に用いられる。狭義には田園地帯の観光を意味し、広義には田園地帯以外にリゾート化されていない、海浜や山岳地域の観光をも含む (大島 1993:60-61)。本稿では広義の定義に従う。

先述のように、グリーン・ツーリズムは、おもにヨーロッパなど開発国の田園地帯および地方で行われる観光としてとらえられる傾向がある。また、都市に対する地方新興産業のひとつとして把握されやすい。しかし、グリーン・ツーリズムがこうした地域に限定されず、より広範な地域において展開することを事例から検証する必要がある。

本稿の事例となるニューカレドニアは現在、観光を首位産業として推進しており、年間 10 万人以上の観光客が訪れる。首都ヌーメア近郊および地方で観光開発が盛んに行われている。南太平洋という、欧米の開発国からみて周縁地域にあたる島であるニューカレドニアは、観光局や旅行会社が広告に利用する「楽園」「リゾート」「マリンスポーツ」「サンゴ礁」などのイメージに沿った観光を展開するだけでなく、近年において内陸部観光などの新しい観光が出現しはじめた。グリーン・ツーリズムも少数ながら内陸部観光のなかでみられる。しかし、ニューカレドニアは近隣のヴァヌアツやフィジーと比べ、観光において依然として民族性や

環境・生態系よりも海のイメージが強い。その一方で、豊かな動植物や変化に富んだ地形であること、地殻変動により孤立した島での進化のため固有種の生物が豊富なこと⁽¹⁾ 農業や牧畜業が地方において盛んであること、先住民の文化をはじめ多様な民族文化があることなどは、あまり観光客に知られていない。つまり、ニューカレドニアの観光は様々な可能性があるにもかかわらず、ステレオタイプにイメージ化されたままである。したがってニューカレドニアのグリーン・ツーリズムを検討することは、従来の事例研究にとどまらない、グリーン・ツーリズムの新たな可能性を提示する意義をもつ。

つづいてニューカレドニアの観光を概観し、グリーン・ツーリズムの特徴と問題、および課題について分析していく。

2. ニューカレドニアの観光概説

ニューカレドニアは本島グランドテール (Grande terre) およびロワイヨーテ諸島 (Iles Loyaute) , イルデパン (Ile des Pins) , ベレップ (Belep) などの離島から成る、総面積が 19,000km² の島嶼である。南回帰線上に位置した亜熱帯気候で、本島グランドテールを南北に貫く中央山脈により、西海岸は沿岸にマングローブ林、内陸部はサバンナ気候の乾燥地帯、東海岸は湿潤な亜熱帯植物相に分断される。1500メートル級の比較的低い山脈は山麓に熱帯雨林を形成し、頂上付近に低木林がみられる。またマグマの隆起により形成された土壤は鉄、ニッケル、コバルト、クロムなどのミネラルを豊富に含むラテライト (赤土) であり、独特の景観を構成している。

1774年にイギリス人航海者ジェームズ・クック (James Cook) により、いわゆる「地理上の発見」がなされ、ヨーロッパ列強、とくにイギリスとフランスの覇権競争の舞台となる。しかし約 3500 年前の遺跡が発見されており⁽²⁾、また「発見」以前からメラネシア系のカナク (Kanak)⁽³⁾ が定住していた。1853年にフランスはニューカレドニアを植民地とし、現在もフランス海外領土である。フランス政府はこの島を流刑地として利用し、1860年代のニッケル鉱脈の発見を機に鉱山開発を進めた。そして1970年代にニッケルブームとなり、いたるところで露天掘りの採掘が行われた。これにより雨などで河川は赤土色に汚濁し、河口付近の湾内に住む固有種の海洋生物が減少していった。水質汚濁だけでなく、ヌーメアのニッケル工場での精練作業などで排出される煙による大気汚染も深刻化し、政府は協議を重ね検討した結果、意図的にニッケル産業から観光産業へのシフトを計った。

1973年に現在の地中海クラブにあたるシャトー・ロワイヤルが開業し、翌年には現在のル・サーフホテルにあたるカジノ・ロワイヤルがオープンした。81年に年間観光客数が79,000人、83年には90,000人であったが、1984年から85年にかけてフランスからの独立に関

する政治闘争が悪化し、各地で暴動が起こったため、観光客数は5万人台に激減した。政治闘争の収束後、90年代に入って観光客数が回復し、1998年には103,000人となっている。観光施設はヌーメア近郊のアンスパータ地区に集中しており、近代的な設備を持つ大型リゾートホテル、水族館、レストラン、カフェ、ショッピングセンターが建つ。1998年の推定観光収入は280億CFP(パシフィック・フラン)であった。ニューカレドニアは3つの州、すなわちヌーメアのある南州、北州およびロワイヨーテ諸島州に行政上分けられているが、観光局についても本部の下に3つの州の観光局が置かれている。3州の観光局ともヌーメアの中心部およびアンスパータ地区に設置され、観光客に資料や情報を提供している。

観光局の観光客に対する定義はWTO (World Tourism Organization: ニューカレドニアは1994年に加入)の分類に基づき、全体を旅行者(voyageurs)とし、訪問者(visiteurs)と観光統計に包含されない人々、たとえば移民、軍関係者、難民、トランジット客、外交関係者などに二分される。訪問者は観光客(touristes)と周遊旅行者(excursionnistes)に分けられ、前者は少なくとも現地に1泊以上した訪問者、後者は24時間未満、滞在した航空機か船舶により到着した訪問者と定義されている。

1998年の観光局の統計によると出身国別観光客は日本が年間約35,000人で第一位、フランスが約28,800人で第二位、オーストラリアが約15,000人で第三位、ニュージーランドが7,100人で第四位、その他となっている。このうち日本人観光客の大半は利便性と安価な価格など様々な理由から、日本の旅行会社が企画するパッケージツアーで訪れる。彼等は現地の提携旅行会社の空港送迎、滞在地でのツアー申込み、各種のサービスを受けることになる。日本人客の平均滞在日数は1998年で6日である。一方、フランス人観光客はニューカレドニアがフランス海外領土であるため言語の問題もなく、フランスから遠距離にもかかわらず多い。しかも、平均滞在日数は1998年で33日と長い。また、個人旅行者が目立ち、ニューカレドニアに住む友人や家族・親戚を訪ねての旅行が8,000人と全体の1/4を占めている。このように観光客の国別に滞在パターンや目的が異なるだけでなく、イメージも異なる。

観光局の報告書によれば、フランス人観光客はニューカレドニアを「遠い定期便」、ニュージーランド人観光客は「南太平洋のフランス、メラネシア文化」、日本人観光客は「天国にいちばん近い島」というイメージをもつ。このようなイメージの差は居住国においてマスメディアから得られる情報の影響を受けている。

さらに、ニューカレドニアは海洋リゾートを目的に訪問する観光客が圧倒的に多いため、現地発のオプション・ツアーとして海洋ツアーが発達している。離島へのツアーやヨットクルーズ、アメデ灯台(Le phare Amedee) ツアー、エスカパード(Escapade) 島ツアー、ダイビングやパラセーリング・釣り・サーフィンなどのマリン・スポーツ・アクティビティが多数みられる。その一方で、ここ5~6年の間にグランドテールを中心に、内陸部へのツアーが

現地の旅行会社によって企画・催行されはじめた。たとえばチオ・カナラ (Thio/Canala) へのツアー、カヌー、リビエルブルー (Riviere Bleue) 州立公園ツアー、乗馬、ハイキング、登山、ヤテ・ゴロ (Yate/Goro) へのツアー、南部一周ツアー、滝下り、いなかツアーなどである。これらのツアーは生態学習と観察、自然環境でのスポーツ、地方の田園地域や集落訪問、生業見学などでエコ・ツーリズムに含まれる。とりわけ「いなかツアー」や「ブーライユ (Bourail) ツアー」、「チオ・カナラツアー」などは地元の生業や景観、生活文化に触れられるツアーであるため、グリーン・ツーリズムに該当する。内陸部観光を上記のように分析することは、単に定義にあてはめただけでなく、ガイド自身や地元のメディアおよびホストがエコ・ツーリズム、ツーリズム・ヴェールと呼ぶこと、つまりホストによって内面化された観光概念⁽⁴⁾であることにも基づく。

本稿では、上記のような観点からニューカレドニアのグリーン・ツーリズムにあたる「いなかツアー」と「ブーライユツアー」、「チオ・カナラツアー」について分析する。

3. ニューカレドニアのグリーン・ツーリズムの分析

3.1 ツアーの諸事例にみる特徴

まず、各ツアーの概要について述べると、「いなかツアー」は6年前にS旅行会社の経営者Gがオーストラリア旅行で体験した家庭訪問ツアーおよびA旅行会社でガイドをしていた頃のツアー・コースから、原案を企画した。Gはニューカレドニア生れのフランス人で植物や生態系について詳しく、自然について学習するツアーをやりたいとP社に協力を依頼した。P社の日本人ガイドの協力を得て、ツアーの日本語名「思いっきり！いなかツアー」に決定し、コースを徐々に修正していった。歩きにくい足場の悪いコースを省き、ツアー名に沿ったいなかのイメージを重視して、エビの養殖場やGのおじが経営する牧場に寄ることにし、さらにエビをレストランで料理してもらうことにした。こうしてコースは12月から3月頃にかけてはエビの養殖場へ⁽⁵⁾、ファリノ (Farino) の「シェマミー・レストラン (おばあちゃんの家)」で昼食、Gの故郷であるサラメア (Sarramea) の果樹園と実家の庭見学、プチクリ (Petit Couli) 部族のカーズ (case)⁽⁶⁾ を車窓見学、牧場での乳絞り体験になった。

「ブーライユ・ツアー」はC旅行会社の経営者であるFが企画・主催する。Fはアジア系フランス人で、A社でのガイド経験を生かして1年前からC社を興した。本島の西海岸を北上し北州に近い町ブーライユを訪れる。コースはブルパリ (Boulouparis) のニアウ (niaouli)⁽⁷⁾ エッスンス抽出工場の訪問、ラフォア (La Foa) 近郊のウアトム (Oua Tom) 部族の集落訪問と植物観賞散策、ブーライユのレストランで昼食、ポエ (Poe) ・ビーチ、テレンバ要塞 (Fort Teremba) 跡を巡る。

「チオ・カナラツアー」は数社が主催しているが、ここではA社主催のツアーをみる。A社のガイドが案内し、シカの牧場、内陸の露店見学、チオのニッケル鉱山積出し港見学、カナク経営の民宿で昼食、川辺の植物見学、カナラの温泉と町見学（車窓）、サラメアのプティクリ部族のカーズを車窓から見学する。調査のため私が参加した時のガイドはA社専属のヴァヌアツ出身のガイドJであった。

これらのツアーに共通する特徴を検討すると、次下の5つにまとめられる。

- ①参加者が小人数に制限され、催行日も制限されること。
- ②ニューカレドニアの歴史、生態、民族文化に詳しいガイドがドライバーを兼ねて案内すること。
- ③コースが重複しており、見物のポイントが地元の生業・生活・自然に絞られていること。
- ④ガイドがカナク以外のニューカレドニア居住者で、英・仏語に堪能なこと。
- ⑤ツアー・コースは定型化されているが、参加客によってはコースを多少変更するなど、比較的自由であること。

まず携行人員の幅が狭い特徴が挙げられる。「いなかツアー」では最小4人から最大8人で、「ブライユツアー」は最小が2人で最大が8人、「チオ・カナラツアー」も最小2人で最大8人となっている。これは現地でミニバスとよばれる小型ライトバンをツアーに利用するため、車の座席数に関わっている。最小携行人員についてはツアーが成立する複数名であることが条件となっていて、旅行会社により若干異なるが、最大携行人員はガイド用の席を除いたミニバスの座席の限界と一致する。参加希望者は携行人員の幅に含まれる場合、参加が可能になる。仮に1人だけ希望してもツアーは催行されず、また既に満員となった場合も断られることになる。携行人員に制限があるだけでなく、催行日も制限される。「いなかツアー」は立ちあげ当初から数年間は週1回の催行で、後に申込み者増加のため週3～5回と催行回数が急増した。「ブライユツアー」は申込み人数が最小携行人員に達した場合、参加者の指定した日に決定し、他の申込み者を加える形をとる。つまり、リクエストにより催行が決定する。「チオ・カナラツアー」についてもA社が基本的に週1回の催行日を決めているが、最小携行人員に達してなければ中止となり、次週の催行日に繰り越される。このように参加者数や催行日により制限される。

次にガイドはドライバーを兼ねており、基本的に1人で観光客を案内する。ガイドはニューカレドニアの歴史や地理、自然生態系、民族文化に習熟していて、移動中および下車した見学先で観光客に説明する。「いなかツアー」のガイドGは歴史、地理、文化、環境問題に詳しいが、とくに植物について熟知し固有品種の学名や帰化植物の原産国や特徴について語られる。この背景にガイドの父親が接ぎ木の専門家であること、ガイドが幼い頃から植物に接しており、両親から植物など生態に関する知識を学習したことがうかがえる。「ブライユ

ツアー」のガイドFも同じく歴史、文化、植物や環境問題について詳しく、とくにニューカレドニアの近代史や環境による植物の適応について詳しい。ほかにFの主催する「ヤテ・ゴロツアー」でも乾燥地帯への植物の適応について詳しく説明がなされる。「チオ・カナラツアー」のガイドJも歴史や地理、文化、生態について詳しく、とくにカナクの文化や植物の利用について詳しい。Jはヴァヌアツの南太平洋大学分校にて学び、ニューカレドニアで長年ガイドをしてきた。カナクの文化や部族の慣習について観光客に説明し、カナクの家屋の素材について竹、コンクリート、トタンなどが「近代的」なもので、一方屋根・壁のニアウリの樹皮、柱などの木材は「伝統的」であることを解説が加えられる。植物についてもカナクの食用、薬用、さらには狩猟や殺害用の毒を含むものを分別する。カナクについても教育、慣習、クラン・部族、宗教、婚姻などについて説明される。

また、各ツアーのコースが一部類似している。これは観光客が滞在するホテルを出発して、日帰りできる範囲でツアーを企画すると、片道 160km 程度が限界距離となり、地域としてはブルーアイユやカナラまでが訪問できる限界の田園地域となるためである。つまり農業や牧畜業が盛んで、自然の多い南州の北部地域がニューカレドニアのいなかとなる。南部は赤土の大地と灌木が広がり、田園風景はあまりみられない。ヌーメアからラフォアまでは1本の道路しかないで、類似したコースとなる。また、見物のポイントは地元の生業を見物したり、生活や自然に触れられる場所に絞られる。とりたてて名所・旧跡のない、田園地域の見物においては地元の生活や自然を売り物にしている。たとえば、「いなかツアー」ではエビの養殖場・果樹園・牧場などの生業を見学し、植物観賞し、見晴らし台から景観を眺め、レストランでは地元の材料であるタロイモ、ヤムイモ、キャッサバ、バナナ、ココナッツミルク、パイヤ、豚肉・鹿肉などを使った家庭料理を食べる。「ブルーアイユツアー」でもニアウリのエッセンス抽出工場を見学し、ウアトム部族の集落で部族ガイドの説明でカーズを見学し、小道を散策して生活に欠かせない植物（カナクが煙草代わりに使う葉、タロイモ、パッションフルーツの原種、ココヤシ、入れ墨に使う果実など）をみる。そして、ブルーアイユの高台から景観を眺め、レストランでは鹿肉のカバブ（串焼き）、ポワソン・クリュ⁽⁸⁾、フルーツが提供される。このツアーで唯一の観光名所は、19世紀にフランス軍により設置されたテレンバ要塞である。「チオ・カナラツアー」では鹿牧場を見学し、ニッケル鉱石の積出し港を見学し、山間部の部族の露店見学、カナラの温泉施設跡を見学する。チオに近い民宿ではカナクの伝統的な料理であるブーニャ（bougna）⁽⁹⁾や青パイヤのサラダ、フルーツが出される。

ガイドはカナク以外のニューカレドニアの在住者である。「いなかツアー」のガイドGはニューカレドニア生れのフランス人であり、「ブルーアイユツアー」ガイドFはアジア系フランス人で、「チオ・カナラツアー」のガイドJもヴァヌアツ系メラネシア人でいずれもカナクではない。よってカナクについての説明は「我々」でなく「カナク」と示し、ニューカレド

ニアの先住民として自分とは区別することになる。観光客が実際にカナクと接するのは民宿や生業の現場、町、部族集落訪問などにおいてである。また、ガイドGは英・仏に堪能で、日本語・スペイン語も日常会話程度話せるため、様々な国からの観光客に対応できた。FとJも英・仏語に堪能であり、最も参加の多い、フランス、オーストラリア、ニュージーランドからの客に対応できる。

さらに、ツアーのコースは概して定まっているが、参加客によってはコースを多少変更することもある。「いなかツアー」ではたとえば日本のテレビ局や雑誌などの取材関係者が申込み場合、撮影のためコースを養殖場・牧場・レストランに限定した。P社が試験的行った大型バスによる15人のツアーの場合、果樹園への未舗装の小道に入っていくのが困難であるため、果樹園訪問を省くこともあった。ガイドGはかつては観光客のため、プティクリ族の集落で下車してカーズ前で記念撮影したこともあったが、その後部族長の反対のため車窓見学となったと話す。また、ニューカレドニア在住のフランス人とフランスから来た友人のグループが参加したときは、帰りに通常の道路を通らず、農家の点在する牧場と平原沿いの細道を数キロ巡るコースを走った。「ブーライユツアー」についてもニュージーランド人の参加者が、太平洋戦争で亡くなった父親の墓がブーライユにあるので墓参りたいとリクエストした際、特別に墓地に寄り、ブーライユ在住のフランス人の英語教師を案内役に墓参りをした。この際ほかの参加者も同行することになる。通常のツアー・コースから大幅に外れることはないが、ガイドが参加客の目的や質を考慮したうえで、コースを若干変更したり場合によっては新たに加えたりする。つまり、これらのツアーではコースが定型化されているが、多少コースを変更する程度の自由がきくといえる。

このように、これらのツアーには共通する特徴がみられる。次に、ツアーの「持続」に関する問題を考察する。

3.2 「持続」に関する問題

グリーン・ツーリズムは地元の生業・文化・素材を生かし、「持続」するものでなければならない。しかし、ニューカレドニアのグリーン・ツーリズムはこれに関する問題がみられる。

まず第一に、ガイドのライフ・スタイルや価値観と現実の労働とにギャップがみられる。ガイドは在住社会のライフ・スタイルを維持し、その中で仕事をこなしたいと考えるケースがある。それゆえにガイドという職業にライフ・スタイルを合わせようとするのを好まない。ニューカレドニアにおいて観光産業の繁忙期である7月から10月、12月には内陸部へのツアーの催行回数も増加する。ガイドは多忙になり、最も利益を挙げられる機会であるが、不満がでるのもこの時期である。「いなかツアー」では1998年8月から約1年間ほど、催行回

数が急増したため、フランス生れのガイドBを雇用した。Bは航空会社で長年経験を積み、植物の知識もある程度持っている。ガイドを始めた当初はGに同行する研修の形であったが、1999年にはGがレストランを経営したため、ツアーへは専らBが行くことになった。それに伴って、Bは次のような不満をもらした。要するに、「週3日以上働きたくない。Gに訴えたが、気にかけてくれない。働けばお金が入るからよかれと思っているらしい。先週は6日働いた。3日が限界だ。3日も“いなか”は飽きるし、疲れる」というものである。

Gも1人でガイドをしていた1998年の7月に、ガイド業の多忙さと不規則さを熟知しているはずであったが、疲労してつぎのような不満を述べた。それは、「このところ睡眠不足だ。連日ツアーが入っているし、休みの日も家の庭仕事とかやらされるんだ。休ませてもらえない。とても疲れている。休みたい。この頃眠れない」というものであった。

また、ニューカレドニアでは日曜日はほとんどの店舗や企業が休みとなり、観光産業に関連した土産店やレストラン、旅行会社もほとんど閉店するため、ヌーメアの中心街は平日とは異なり閑散とする。ヌーメア近郊に住む人々は家族や友人とともに郊外にレジャーに出かけたり、離島や地方などへ小旅行したり、教会へ祈りに行ったり、あるいは家でゆっくり過ごす。働く人はホテルやレストラン、土産店など観光産業の一部の人々だ。最近、日曜でもヌーメアやアンスパータで観光客向けに店を開けているケースも増えたが、日曜に働くことへの反発をもつガイドもある。Bについての不満の発言をみると、「日曜は行くのは嫌だとGに言ったが、それでもやれという。Gと喧嘩した。休みが欲しい。日曜は休みたい。誰も日曜に働いてないのに（自分だけ）働くなっておかしい」というものであった。

観光産業の側からみれば、ヌーメアの店が閉まる日曜こそ、観光客に遠方のオプションル・ツアーに参加してもらうよい機会である。そこで旅行会社では観光客に町のショッピングや散策を日曜は避けて終日ツアーに参加するよう勧める。実際に観光客は自分の国とは異なる日曜のヌーメアに驚き、「何も買えない。見れない」と不満を述べる場合もみられるが、海洋へのツアーだけでなく内陸部ツアーの申込みも多い。P社を窓口として日本人客が参加する「いなかツアー」では、日曜は日本人客で満員となることも多い。また、海洋ツアーや離島ツアーが満員で断られた客が、どれでもよいからと申込んだケースも数件あった。ほか内陸部ツアーでは地元の家族が日曜にレジャーを楽しむため、ツアーに参加する場合とヴァカンス客の申込みがみられるが、いずれも少数にとどまる。Bはさらに次のように言った。要するに、「日本人客がどうしたいかは悪いけど関係ないし、興味が無い。休みがほしいんだ」と言う。また、C社ガイドのFも日本人向け旅行会社を窓口にしており、最近「プーライユツアー」だけでなく内陸部ツアーの催行回数が増加したが、L社にクレームを出した。それは、「これ以上日曜に申込み客を流さないでほしい。日曜は家族と一緒に過ごしたい」というものであった。

さらに、ガイドだけでなく、ツアーで訪問する施設関係者も、観光のサービスより自分たちのライフ・スタイルを重んじる。「いなかつツアー」である時、乳絞り体験をする牧場に到着したが、搾乳は終了時間より早く終了しかけていた。これからブーライユで農業祭りがあるので、家族で見に行くから早めに仕事をしたという。観光客には最後に搾乳中の牛で体験してもらおうことになったが、出発したいので手早く終えてほしいと家族が要請した。また、レストランでも知人が亡くなった日、仕事をしたくないので休み、一週間喪に服したいから「いなかつツアー」は中止してほしいといった。ガイドらが説得して何とか店は開けたが、サービス人員が足りず、結局ガイドらが料理の準備やサービスを手伝った。

第二に、内陸部ツアーを主催する小規模な旅行会社全般にいえる問題だが、グリーン・ツアーにおいてもガイドがドライバーであり、経営者であり、場合によっては申込み受けも行うという点である。換言すれば、1人で全てを行い、「代替不可能な」状況である。これについて、Gは次下のように述べている。要するに「ニューカレドニアのエコ・ツーリズムの一番の問題はガイドが説明をして、ドライバーもすることだ。大きな旅行会社はちゃんとガイドとドライバーを分けている。でも小さな会社ではこれを1人でやるしかない」というものである。

「いなかつツアー」では、Bを雇用したが、BとGが一緒に行くことはBの研修以外にはなく、Bが「いなかつツアー」に行く時はGは別のツアーでガイドをした。C社は経営者兼ガイド兼ドライバーである。A社は数名のガイドがいるが、「チオ・カナラツアー」など各ツアーにガイド1人を担当させ、ガイドがドライバーを兼ねる。つまり、ミニバスの座席になるべく多くの客を乗せ採算を上げるため、ガイドはドライバー役をこなす必要がある。ミニバスを大型車に変えないのは、大型バスが高価で維持が困難であるだけでなく、4WD機能が必要な小道に入っていけないからと解釈できる。ガイドが運転から説明・通訳など全責任を追うやり方は、ガイドを疲労させ仕事への意欲を減退させてしまう。

第三に、グリーン・ツーリズムにはニューカレドニア政府や観光局、あるいは農業関係の組織、自然保護団体、地方の市町村などがほとんど関わらず、主催会社が個別に契約した生業施設や店、民宿、部族集落との関係で展開している。地元の市町村や農業組合、地元住民の参加や関わりが稀薄である。そのために、「農業／地元産業の新興」や「村おこし」とはいえない。「いなかつツアー」で訪れるレストラン経営者はGの親しい知人であり、果樹園は実家、牧場はおじが経営するように、親戚・知人ネットワークである。「ブーライユツアー」では、C社と契約したレストラン、部族の集落、工場を訪問し、「チオ・カナラツアー」でも同様である。観光局や市町村、地元の組織・団体が資金援助や運営に関する協力をしていない。南州観光局では各社のパンフレットをヌーメアの案内所に置き、観光関係の雑誌社とタイアップしてメディアで宣伝（1998年）などの協力はしているが、グリーン・ツーリズムに関して特

別に配慮したものでなく、観光全体を新興させる試みの一部でしかない。

第四に、ツアー主催会社と仲介する旅行会社との間に、おもにパンフレットやチラシなどの宣伝に関する価値付けにズレがみられる。これは、グリーン・ツーリズムだけでなく内陸部ツアー全体に該当する。S社、C社などの小規模なツアーを主催する会社は、独自のチラシを制作してツアーを宣伝しているが、ほかに大きな旅行会社と提携してチラシやパンフレットに掲載し参加客を流してもらうことで、ツアーを維持している。S社は3社の日本人向け旅行会社および現在営業を停止したT社と提携し、とくに日本人客の獲得に成功し、「いなかツアー」の参加者の約90%が日本人観光客であった。これにはP社の協力に負うところが大きい。P社は日本語パンフレットの1ページを使って、「いなかツアー」を写真入りで詳しく紹介している。「海だけじゃないニューカレドニアを体験」と題して、「本島のまんなかの自然満点の村々」「いなか風家庭料理」「ここならではの食材」などの説明を記載している。しかし、ほかの旅行会社のパンフレットにおいてはお勧めツアーとして記載されず、説明やページ占有率が少なくなる。また、C社は英・仏語のチラシを制作し、A社とも提携している。しかし、C社のチラシでは半日ツアー、終日ツアーの順で全面に記載された4つの内陸部ツアーが、A社の英・仏語のチラシでは4つのうち2つのツアーを記載するのみで、しかも記載の順番が観光客に人気のある離島ツアーの後になっている。読み手である観光客からすると、ツアー・リストの下方に埋もれて発見しにくい。A社はチラシの表面に離島ツアー、内陸部ツアーの順に載せ、裏面に海洋ツアーやマリンスポーツ・アクティビティを載せている。改訂前のチラシでは内陸部ツアーを表面の上部に、海洋ツアーを下部に、離島ツアーほかを裏面にしていた。

これは内陸部ツアーを専門に扱う小規模な旅行会社が、情報提供・宣伝の機会に乏しく、大手の旅行会社を窓口にして集客しなければならない観光構造に依拠している。大手の旅行会社からすれば、ニューカレドニアの新しい観光資源として、内陸部ツアーを販売していきたいとは考えているものの、実際に収益を上げ経営を維持しているのは、観光客がイメージして申込む海洋ツアーや離島ツアーである。とくに、離島ツアーは航空機を使用し、終日パッケージ型となるので高価で販売でき収益率が高い。そのために、大手旅行会社の扱うニューカレドニアのヌーメア発のオプション・ツアー全体において、離島および海洋ツアーに比べて内陸部ツアーは価値付けが低くなってしまふ。これはさらに日本人向け旅行会社のように、「海」や「天国にいちばん近い島」のイメージを求める客を中心にツアーを販売する場合顕著となり、内陸部ツアーの販売率は全体の11%から20%にとどまる。フランス人やオーストラリア人などのメラネシア文化や内陸の自然に関心をもつ観光客を扱うA社やT社などでは、内陸部ツアー販売率は30%前後となる。100%近く内陸部ツアーを売る主催会社はこうした困難な状況にある。

4. グリーン・ツーリズムの今後の課題

これまで考察してきたように、ニューカレドニアのグリーン・ツーリズムにおいては「持続」に関する問題があることが明かになった。この諸問題にもとづいて、今後の課題について検討する。

まず、内陸部ツアーの不安定性の克服である。内陸部ツアーを扱う主催会社の経営者兼ガイドの数名が「ニューカレドニアで観光業を営むのはとても難しい。とても不安定だからだ。成功しているのはごく少数の会社だけだ」という語りをした。彼等が成功した旅行会社として挙げるのは、大手の海洋ツアーや離島ツアーを主体に販売する旅行会社である。主催会社の経営の不安定性は参加者が思うように集められない状況だけではない。経営規模を拡大した場合それを維持できない状況をも含む。S社は1998年に日本のガイドブックやテレビ番組で紹介されたため、「いなかツアー」への日本人客の参加が増加した。GはガイドBを雇用し新車を購入、ツアーの種類・催行回数を増やして経営を拡大した。しかし、1999年初頭に参加者が減少しはじめ、これを危惧したGはレストラン経営をはじめた。Bがガイドしたが、仕事に不満を募らせ逸脱した行動を繰り返したため、1999年後半にBは解雇されS社は閉業となりツアーは中止となった。ほかに現地の旅行会社数社が閉鎖しているが、いずれも内陸部ツアーを扱う企業であった。

このような不安定性を克服しようとする試みが出現しはじめた。それはエコ・ツーリズムを専門にする小規模な旅行会社が、はじめはヴァカンスなど休暇の折に仕事を融通するなど、互いに手伝っていたものが、協力して1つの事務所を構えるに至ったケースである。I社では困難であった事務所をもつことが可能になり、ツアーの窓口を1本化することができた。また南州観光局にもパンフレットを置き、積極的に宣伝を行っている。事務所には必ず受付を置くことで、携帯電話しか連絡手段のなかった会社にも確実に確認・申込みができるようになった。しかし、依然としてガイド兼ドライバー兼経営者という構造は解消されない。従業員を雇うだけの収益をあげられない事情が存在する。このような問題をいかに解決するかは、旅行会社の統合や組織化およびガイドの職業観に関わっている。

また、グリーン・ツーリズムはニューカレドニアにおいて、開発国の地方においてみられるような農業・牧畜業などに限定されないため、エコ・ツーリズムやエスニック・ツーリズムと区別されにくい。Gは「いなかツアー」についてアグリ・ツアー、エコ・ツアー、ツーリズム・ヴェールと言及した。地元新聞社 Les Nouvelle はツーリズム・ヴェールと表している。しかし、このツアーでは原生林の谷間での植物観賞やカナク部族の家屋を車窓見学するなどの要素も含まれる。「ブーライユツアー」はウアトムの集落を訪問し、部族のガイドからカーズや慣習について説明を受け、植物観賞のため散策するので、エスニック・ツアーが混在して

いる。「チオ・カナラツアー」でも山間部のカナク部族の果実や野菜を売る露店を訪問し、ウロウエ (Ouroue) の大首長の娘が経営する民宿で、伝統的なカナクのブーニャを食べる点ではエスニック・ツアーといえる。カナラへ向かう川辺での植物観賞と散策はエコ・ツーリズムにあたる。このような1つのツアーに含まれる様々な要素は、ニューカレドニアの田園または地方が、農業・牧畜業などの生業の場だけでなく、カナク部族のクチューム (慣習) 空間もあるためといえる。人の住む場所のすぐ脇は原生林であったり、自然保護区に指定されていたりする。このような地理的・社会的事情を考慮すると、エコ・ツアーやグリーン・ツアー、エスニック・ツアーと厳密に分けることは困難である。L社は地方の牧場見学、部族集落訪問、家庭料理、マリン・スポーツ、イルカ・ウォッチングなどを取り入れた新しいツアーを企画している。このような「混在型」のツアーが今後増加すると予想される。

さらに、地元材料を使った日常食が、各ツアーに取り入れられているが、ツアーによっては観光客に理解されにくい。「チオ・カナラツアー」ではブーニャ料理が提供されるが、カナク文化について学習したり、ガイドブックなどで情報を得た参加者にはわかりやすい民族料理である。ガイドJからも詳しい説明が事前にあった。しかし、「いなかつツアー」ではファリノ近辺の日常食が出される。青パパイヤまたはウリのサラダ、野生の豚または鹿肉の煮込み、米、タロイモ・キャッサバ・ヤムイモ・バナナなどのココナツミルク煮である。とくに、ココナツミルク煮はブーニャと誤解される事が多い。ファリノは1999年統計では人口350人のうち76%がヨーロッパ系という入植者の町であるので、チオ・カナラなど東海岸のカナクが多数住む集落とは異なる。レストラン経営者の家族も混血化が進み、ヨーロッパ、メラネシア、アジアの系譜をもつ。Gが子供の頃食べた家庭料理と説明するように、この地方で一般的に作られる料理である。「ブーライユツアー」では一層理解しにくい鹿肉のカバブが提供される。これは1871年に旧仏領アルジェリアのカピリー地方 (Kabyle) の反乱でニューカレドニアに流刑されたカピリー人が、後にブーライユに定着したことに由来する。彼等はイスラム教徒であり、ブーライユに墓地、モスクがある。ここでは、彼等がもたらしたカバブなどの料理が、現地ととれる鹿と融合して、レストランや家庭で作られるようになった。観光客にとって地元料理がカバブとは理解しにくく、移民文化が定着したことを説明し、様々な民族文化が地方でもみられることを知らせる必要がある。

5. おわりに

ニューカレドニアの観光産業は、南州のヌーメアを中心に開発が進み、観光客がイメージとして抱く「海洋リゾート」「楽園」「天国」「南太平洋のプチ・パリ」などの要素を取り入れたツアーを企画した。とくに、海洋ツアーや離島ツアーが主流であり、メディアにおいても積

極的に利用される。これに対して、「海とは異なる」観光として、近年本島の内陸部を巡るツアーが出現した。このうち、本島の田園地域を訪問し、地元の生業や文化、自然環境を見学するツアーがニューカレドニアのグリーン・ツーリズムにあたる。これまで、ツアーの諸事例から共通する特徴と「持続」に関する問題を分析してきた。さらに、今後の課題についても検討を行った。

分析の結果として、ニューカレドニアにおけるグリーン・ツーリズムは従来のグリーン・ツーリズムの概念に加えて、観光構造、ガイドのライフ・スタイルと価値観、地元住民の多様な文化といった条件が関与することが明らかになった。まず比較的小規模な旅行会社が個別にツアーを催す傾向は、ニューカレドニアの地域振興と観光が結合せず、政府や観光局または地元の住民による農業団体や組織の関与がないことを示す。このために、旅行会社の主導的な企画となり、ユニークなツアーが創造される一方で、ニューカレドニアの観光構造の拘束を受けることになる。ニューカレドニアではあまり発達していない内陸部ツアーに関して、情報提供が不十分であり、主催会社が少数分立している。参加者を獲得するために大手の旅行会社と提携することがあるが、これは主流な観光である海洋ツアーとの競争を意味する。しかし、現在のところ競争の段階に至らず、単に珍しい商品という位置付けでしかない。唯一S社がP社の協力で「いなかツアー」を成功させた例がみられるが、こうした事例は希少で、このツアーも「持続」できなかった。これはガイドのライフ・スタイルと価値観が影響を及ぼしたといえる。個々のガイドがグリーン・ツアーで様々な役割を果たすため、彼等の観光に対する姿勢が重要な鍵となる。ガイドが自己のライフ・スタイルに固執し、観光という仕事に折り合いをつけられない場合、ツアーの「持続」は困難である。それは当該社会の価値観に深く根差している。

また、グリーン・ツーリズムでは地元の資源を利用することが特徴の一つだが、ニューカレドニアの地方文化がカナク、フランス系入植者、移民、さらには混血など多様な民族性に基づくため、一様な資源を提供するものとならない。これは観光産業側からみると、イメージ戦略を立てにくく販売が難しいし、観光客にとっても理解しにくい。たとえば、ニューカレドニアのある地方のイメージを一元化できない。同じ地域を訪問するツアーも主催会社によっては内容が異なってくるのである。地方の資源を活用し、地元の生活や自然をツアーにおいて示すには、ガイドが地元住民、自然環境と観光客の間の架け橋となり、理解を進めていかねばならない。

グリーン・ツーリズムは、開発国の地方における農村観光やファーム・ステイだけではない。地方の資源をあらゆる形で生かした多様な観光のあり方である。ニューカレドニアの事例でみる限り、エコ・ツーリズムおよびエスニック・ツーリズムとの線引きは難しく、フランス海外領土であることからフランスの観光概念「ツーリズム・ヴェール」の影響を受け、そ

れに太平洋の島嶼、メラネシアという地理条件や社会・文化的要因が作用している。このような地域の変数を考慮に入れることによって、グリーン・ツーリズムの幅が広がるとはならず、さらに今後は離島のグリーン・ツーリズムについて調査を行っていききたい。

謝 辞

本稿は2000年1月23日の国立民族学博物館の共同研究会「自律的観光の総合的研究」での拙報告をもとに、大幅に修正を加えたものである。報告の機会を与えて下さった共同研究会の主宰者である石森秀三先生に感謝の意を表したい。

注

- (1) ニューカレドニアには3250種の顕花植物の76%が固有種で、裸子植物は43種全てが固有種、椰子・シュロも35種全てが固有種である。爬虫類の76%、鳥類の14%が固有種でなかには絶滅危惧種もあり、保護されている。
- (2) 3500年前のラピタ (Lapita) 遺跡がグランド・テールおよび離島にみられる。また岩に彫られた幾何学模様のペトログリフ (petroglyphes) も各地で見られる。
- (3) もとはポリネシア語のハワイ方言カナカ。捕鯨船の白人が酷使したポリネシア人につけた蔑称であった。これをニューカレドニアのフランス人植民者がメラネシア系先住民に対してフランス語風にカナク (canaque) と呼んだ。これが独立政治運動で民族意識の高揚とともに canaque は kanak に綴りが変えられ、自民族アイデンティティを示すものになった。
- (4) エコ・ツーリズム、ツーリズム・ヴェールはフランスの観光概念である。ニューカレドニアがフランス海外領土であるため、観光自体がフランス系の主導で行われた経緯もあり、一般にツアーを分類するときに使われる。
- (5) エビの養殖場は島内に幾つかあるが、「いなかツアー」で訪れる養殖場はエビが成育しきらないシーズンには閉鎖され、夏にあたる12月から3月頃にかけて出荷されるため立ち寄り寄ることになっていた。
- (6) カーズはカナクの部族集落にある首長の家。グラン・カーズとよばれる。部族の話し合いや長老会議、儀礼が行われた家で、現在も使用されているものもある。カーズは地域や部族のクランによって形や素材が微妙に異なるが、円錐形の家屋である。
- (7) ニアウリはオーストラリアのユーカリと同じ属にあたる木で、葉から抽出される成分はアルカロイドを含み、気管支炎の薬として使われる。ニューカレドニアではニアウリのエッセンスは喉・鼻風邪に効くため、土産だけでなく家庭で使用されている。

(8) フランス語で生の魚を意味するポワソン・クリュはもともと、フレンチ・ポリネシアなどで作られた料理である。生の白身魚にレモンを絞り、香味野菜とココナツミルクをあえたもの。ニューカレドニアにはタヒチ人などポリネシア系移民も多く、この料理は一般的に普及している。

(9) ブーニャは太平洋地域にみられる石蒸し料理（ウム、イム、ロヴォ、ハンギと類似）。タロイモ、イニヤム（ヤムイモ）、キャッサバ、魚または鳥肉などにココナツミルクをかけ、バナナの葉で包む。土を掘り下げた穴に焼き石を敷き、その上にブーニャを並べてさらに焼き石をのせて土をかぶせる。焼き石や土の使い方は地域によって異なる。

文 献

井上和衛・中村攻・山崎光博

1996 『日本型グリーン・ツーリズム』東京：都市文化社.

Institut Territorial de la Statistique et des Etudes Economiques.

1997 *New Caledonia Facts and Figures*. Noumea

石森秀三編

1996 『観光の20世紀』（20世紀における諸民族文化の伝統と変容3）ドメス出版.

中村 純子

1999 「ニューカレドニアにおける“もうひとつの観光”：日本人観光客と“いなかツアー”」 『お茶の水女子大学 人間発達研究』22：67-78.

2000 「ニューカレドニアのルーラル・ツーリズムにみるノスタルジア」 『人間文化研究年報』 23：45-52.

Nash,D.

1996 *Anthropology of Tourism*. New York: Pergamon.

Nouvelle-Caledonie Tourisme

1998 *Rapport d'activite*. Noumea.

Pearce,D.

1992 “Alternative Tourism: Concepts, Classifications, and Questions” In V.Smith and W.Eadington (eds) *Tourism Alternatives*, Philadelphia:University of Pennsylvania Press.

Smith,V.

1989 *Hosts and Guests:The Anthropology of Tourism* (2nd edition) Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Smith, V. and W. Eadington (eds)

1992 *Tourism Alternatives: Potentials and Problems in the Development of Tourism.*

Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

山崎光博・小山善彦・大島順子

1993 『グリーン・ツーリズム』 家の光協会.